



千葉敏行

1 はじめに

4月25日(土)朝にFacebookに「ポストコロナの合唱活動を考えよう」というグループを発足したところ、メンバーが1,500名を超えました。全国各地、さらには海外からも名だたる合唱指導者や合唱人が集い、たくさんのご意見をいただいています。裏を返せば、それほどまでに危機感が強いということだと考えています。東北の一合唱愛好家にすぎない私の提案が大きな輪になって、水紋が幾重にも重なり合い、広がり、交錯しながら、ポストコロナの合唱を見つめ、ウィズコロナの合唱活動について語り合ってきました。

2 「ポストコロナの合唱活動を考えよう」グループ発足のときの方針 グループ発足時に情報交換したいと考えていたのは下記のとおりです。

①練習再開に向けて

- ・小学校～高等学校の部活動再開
- ・大学生サークルの再開
- ・一般合唱団の練習再開

②練習再開までにできること

- ・自己研鑽
- ・オンラインレッスン
- ・情報発信・情報交換

- ③練習再開したらやりたいこと
- ④ポストコロナを生き抜くには合唱団がすべきこと
- ⑤その他

3 新型コロナ感染症とは

新型コロナ感染症については、昨年12月に中国で報告され、以後世界に感染が拡大しています。未知のウイルスであり、医療現場の奮闘と研究の進展により、明らかになったことは日々更新されています。様々な情報が飛び交っていますが、私たちはまず合唱との関わりの中で考えていく必要があります。

東北医科薬科大学の佐川元保教授(呼吸器学)は、今回の新型コロナウイルス感染症と合唱活動については、次のように述べています。

- 長い戦いを覚悟しなければならない
- 三密（密閉・密集・密接）は避ける
- 「喋ったり歌ったり」は基本的に良くない
- 「近くで隣り合って歌う」「対面で歌う」は良くない
- 指揮者は皆と対面しているのでリスクがある
- 「接触」「飛沫」の他に「エアロゾル感染」の問題
「エアロゾル感染の原因になるウイルス」が飛んでいれば、呼吸をする限り吸入される
- 学校における合唱部活動再開は運動部より不利
- 感染者が出るのはやむを得ないが、「クラスター」が出るとまずい
- どのような状況になると感染が落ち着くのか、は現時点では不明

などと指摘しています。

4 いま合唱界で起きていること

①対岸の火事

このコロナの自粛が始まったとき、4月ぐらいからは再開できだろうと考えていなかったでしょうか。武漢での出来事は対岸の火事で、2月に入り日本でも少しずつ感染拡大しても何とかなるだろう、たいしたことないだろうと思っていました。

東京では「春コン」が行われました。さぞかし悩み、検討したうえでの開催だったと推察されます。私がかかわる展示会は、市内で感染者が出たら即中止と覚悟して開催、3日間で約2万人が訪れて、無事終えて安堵していました。自粛が始まりかけたとき、コンサートを決行する団体を勇気ある行動と称える声もありました。また、間隔を広くとってマスク着用、消毒して」活動を継続していた合唱団もありました。また、全日本合唱連盟理事長岸信介先生の「合唱を愛するみなさまへ」というメッセージが発信されたときでも、

連休明けからはきっと再び合唱活動を始められるだろう、遅くても7月からは…と考えていなかったでしょうか。

未知のウイルスであり、予想をはるかに超えた、感染の広がり、感染リスク、そして対応・対策による自粛要請です。何よりも、私たちに震撼させたのは、「岐阜合唱団クラスター」ショックです。

②リアル合唱活動の停止

前述の通り、ピークアウトしても第二波、第三波とダラダラと流行は続きます。再び緊急事態宣言が発令される可能性も高く、有効な治療薬とワクチンが開発され多くの人に行き渡るまで、「アフターコロナ」「ポストコロナ」は訪れません。しかし、コロナとともに生きていく「ウイズコロナ」であっても、未知のウイルスであったコロナの対処法が医学的にさらに解明され、合唱活動を注意深く再開していくことは不可能ではないと思います。

- ・コンクールやおかあさんの大会の中止は、合唱連盟の財政を直撃する。
- ・コンクールの中止は中・高の合唱部
おかあさんの大会中止はおかあさん団体
合唱祭の中止は一般団体加盟そのものも疑問視されない。
- ・学生団体は新歓時期に活動できずに、団運営上さまざまなひずみを生む。
- ・少人数の団体は団運営や演奏上ダメージを与える。

そういった危機的状況を認識・共有して、このリアル合唱活動停止を当面継続して、最小限のダメージにとどめる必要があります。

③短期的な課題

- ・医学的見地にもとづいた、リアル合唱活動の危険性についての啓発
- ・ウイズコロナの合唱の危機的状況の共有
- ・合唱団の技術的・モチベーション・帰属意識の維持
- ・音楽科教員の悩み、音楽科の授業に関する問題(歌唱・合唱)への対応
- ・リアル合唱停止や合唱連盟の行手中止に伴う問題への対応
- ・地域によっては学校再開がはじまる。
小学校～高等学校の部活動再開のガイドラインの作成が求められている。
- ・大学構内に入ることを禁じられた大学生、
アルバイトの禁止指示やアルバイトの減少に苦しむ大学生や若者が多い。
大学やユース、若手の一般合唱団の支援。
- ・コンクールを中核にしていた合唱団の喪失感。
活動計画の見直しが必要。
合唱活動の転換。
- ・合唱指揮者・声楽家・ピアニスト
合唱文化の中核となっているプロに対する支援の在り方。

行政への働き掛け。

- ・オンラインレッスンやリモートコーラス・バーチャルクワイヤ
YouTube の活用、SNS を活用した交流や連帯

など、ポストコロナの合唱活動につなぐ合唱活動の在り方を模索することが喫緊の課題となっています。

④中期的な課題

- ・家から定期的に出るルーティーンが崩れる。
合唱の黄金期に青春時代を生きた多くの高齢者が、合唱界から去る。
合唱人口は大きく減少し、合唱界は縮小する。
- ・合唱以外の楽しさに魅力を感じている合唱団員は合唱団を去る。
- ・合唱団員数・合唱団数・合唱連盟の収入・楽譜の売り上げの減少
- ・フリーランスの合唱指揮者・声楽家・ピアニストの経済的困窮
- ・演奏水準の低下・演奏活動も停滞、合唱団横断型イベントし成立しなくなる。
- ・コンサートの観客動員力はさらに低下。
- ・働き方改革が加速度的に進展し、小・中・高の合唱活動が難しくなる。
- ・テレワークが進み、仕事の帰りに合唱するという習慣も変わる。

など、長期化すればするほどそのダメージは大きくなり、大不況が起きれば、さらに問題は深刻なものとなります。

5 ポストコロナの合唱とは

危機は、人々を進化させます。ウィズコロナの期間は、様々な活動や手法が開発されるはずで、既に現在進行中であり、コロナ以前からリモートコーラスに取り組んできた松下耕氏、オンラインレッスンに取り組んできた黒川和伸氏の実践、さらには、本山秀毅氏が提唱した「テレコーラスプロジェクト」など数多く提案され、実践が進められています。

一部の人間のものあったオンラインでの取り組みは一般化されていくことでしょう。リアルレッスンができなくなったプロの音楽家やオンライン授業をせざるを得なくなった教員などが必要に迫られて、取り組むようになるはずで。

オンラインレッスンやリモートコーラス、バーチャルクワイヤなどは、参加者の主体的な取り組みが不可欠で、合唱人の意識や技量が高まることが期待されます。また、事前の準備を周到に必要なから、指導者のスキル向上も期待できます。

しかし、確実に合唱界は縮小し、現在の合唱人口は減少することは覚悟がいるでしょう。現在合唱団に所属している何割かが確実に合唱活動から離れることは避けられません

実は、小学校～大学まで合唱団活動をしていた人間の何割が一般合唱団で歌っているのでしょうか。小・中学校で合唱をしない児童・生徒は存在しません。それらを「潜在的な合唱人口」と考えれば、新規開拓の可能性はあります。ただし、合唱団という枠組み、合唱連盟や合唱団の在り方も大きく変わることでしょう。

6 演奏会場・練習会場の側

私が指揮をしている合唱団は6月にコンサートを予定していましたが、3月に中止を決定しホールに1月への延期の手続きをしました。しかし、延期をお願いした日程は競合する団体がないにもかかわらず、可能だが許可できないという返答でした。

仙台市で「休館なのにサークル活動」と地元紙で報道されました。その中で、「市民センター内の体育館でスポーツしたり、和室や会議室で囲碁や合唱を楽しんだりしている。」と仙台市にクレームが入っている旨の報道がありました。

あるホール関係者は、次のように述べています。

「この騒動が始まり、ホールでの利用が次々となくなり、練習室の利用もご利用者が自主的に取りやめられるところから、会館として”利用休止”、そして閉館（休館）となり、今に至ります。この先、利用施設の再開へと踏み出す時、（もちろん、合唱を含めた）施設利用について、職場でも議論を始めております。単純に「合唱での利用で、お貸ししてもいいのか」という極端な意見や、「施設の広さに応じた利用人数の制限を設ける」パターン、また利用いただく際の注意事項やチェックシートなどが必要ではないか・・・など」

私たち合唱関係者が苦悩しているのと同時に、演奏会場・練習会場の側の苦悩も大きいと言えるでしょう。やはり、活動開始に向けてのガイドラインが必要になってきます。また、換気や消毒など、負担も増えることとなります。

「三密回避」「換気」などを考えると、これまでよりも広いホールや練習会場が必要になり、果たして十分な施設があるのか、活動再開を希望する団体の競合が予想されます。

7 リアル合唱再開に向けて

①部活動再開に向けて

文部科学省は、部活動再開について全般的なガイドラインを示しているが、特に「三密回避」が難しい音楽系部活動への言及がありません。3月27日、北海道教育委員会は、「文化部活動における留意事項」として、

- ・練習場所の換気を定期的に行うこと。
- ・活動場所を分散し、一部屋の人数を減らすなど、実施方法を工夫すること。
- ・吹奏楽部や合唱部などは、パートごとに時間差を設けて練習したり、子ども同士が手の届く距離で練習を行ったりしない、また、向かい合って練習を行ったりしないなど、練習方法を工夫すること。

と、ある程度ガイドラインを示しています。その後、4月6日に北海道教育委員会は、22の運動部の特性を踏まえた活動再開のガイドラインを提示しているものの、文化部に関しては現在に至るまで、示されていません。

②部活動再開私案

私は、学校における部活動は次のような配慮が必要だと考えます。

- ・都道府県教育委員会などの部活動再開のガイドラインにもとづいて、校内のガイドラインを作成し、公開する。
- ・感染防止対策や活動内容や計画について、校内でのコンセンサスを得る。
- ・本人や保護者の同意を得ること
- ・地域への説明を丁寧に行うこと
- ・長期間にわたる休業の後の活動なので、まずは学校生活に慣れることを優先し、その後徐々に注意深く再開するなど、計画的に進める。

まだこの程度で、合唱特有の問題を踏まえたものは作成できていません。

③ガイドライン作成の重要性

既に学校活動を再開している地域もあります。その地域の実践を共有し、全日本合唱連盟のような大きな組織がガイドラインの作成することが求められています。

実際にガイドライン等を作成するにあたっては、合唱経験のある、感染管理にノウハウのある医療関係者などに意見を求めることにより、効果的な対策を行うことが重要です。

また、未知のウイルスで、前代未聞の対応で新型コロナウイルス感染症に関する医学的情報は日々更新されており、新型コロナウイルス感染症対策専門家会議の発表の度に、対応の再検討や微調整を進める必要があります。

こういったことを各都道府県教育委員会や、各学校で、各合唱団で判断するのは困難です。厚生労働省や文部科学省などのページのリンクを張っているだけでは、合唱独自の課題に対応できません。

この取り組みは、一般の合唱団の再開への指針となるはずです。

もちろん、私たちの合唱を拘束するものではなく、地域や合唱団の実態に応じて運用するのは言うまでもありません。

8 全日本合唱連盟に求められること

①他組織の動向から

4月13日、静岡県吹奏楽連盟が全部門のコンクール中止を発表し、全国に激震が走りました。背景には、県教育委員会からの要請があったと言われています。17日には、中部日本吹奏楽コンクールも発表しました。

4月23日文部科学省は、「部活動の地方大会や対外試合、合宿等について」「全国的なスポーツ・文化イベントについては、」「大会の主催者に対して、引き続き慎重な対応が求められることを周知徹底する」と通知しています。

報道の通り、まず全国中学校体育大会が中止となり、全国高校総体が中止となりました。全国高校総体は、

- ・新型コロナウイルス感染拡大の収束には相当な時間がかかる
- ・競技中だけでなく、移動や宿泊等による感染リスクが高い
- ・学校の臨時休校により十分な練習時間を確保することが困難な状況である
- ・全国の医療機関が新型コロナウイルス感染症への対応に迫られる状況にあり、大会実施に伴う事故等に十分な対応ができないこと

などが懸念されるとして中止を決めたとしています。

感染流行の収束も見えず、社会情勢や、部活動の再開もままならない状況、スポーツ以上に相性の悪い合唱の特性などから、全国高校総体と同様、全日本合唱連盟も小学校、中学校・高等学校の全国大会について中止という決断をする必要があります。小学校は埼玉県、中・高は東京都と特定警戒地域でもあります。

全日本吹奏楽連盟は5月11日までにコンクール等の開催について発表するとしていましたが、10日に中止を発表しました。

2020年度 秋季事業の中止

- ・新型コロナウイルス感染は、依然として収束予測の立たない状況
- ・参加団体の皆様、ご来場のお客様、関係する全ての皆様の生命と安全が最優先との結論
- ・全日本吹奏楽コンクール、全日本小学生バンドフェスティバル、全日本マーチングコンテストの中止
- ・コンクール課題曲については、2020年度の作品を来年度の課題曲とする。

学校現場では、合唱部は吹奏楽とともに、同列に認識されているので、極力、全日本吹奏楽連盟と同日に発表すべきでしたが残念でなりません。また、全日本吹奏楽連盟は大学の部、職場・一般の部についても中止を発表したので、同様の対応が求められます。

②合唱をめぐる社会的評価の低下

健康・安全のリスクだけではなく、社会的な評判の悪化を防がないといけません。岐阜県可児市での合唱団クラスターが報道後、ネット上で激しい批判が起き、「可児市周辺では、向こう1年合唱はできない。」と関係者は語っているほどです。

また、前述の仙台市で「市民センター内の体育館でスポーツしたり、和室や会議室で囲碁や合唱を楽しんだりしている。」と仙台市にクレームが入っているという件もあります。

参加者やスタッフの健康や安心安全を最優先に考慮するのは当然ですが、全日本合唱連盟としての社会的使命を考慮し、合唱に対する厳しい批判を避ける意味でも、本年中の全国行事についての決断が求められています。

日本中の合唱団も合唱人も、絶望と恐怖の中にいます。岸先生自らが動画などで全国の合唱人に向けて語り掛けてほしいと願っています。愛知県立芸術大学の学長メッセージ《在学生の皆様へのような動画配信も良いかもしれませんし、全日本吹奏楽連盟の丸谷先生と二人並んで行うというのも良いかもしれません。

③活動再開のガイドライン作り

そもそも、新型コロナウイルス感染症は合唱と相性が極めて悪く、その状態は今後もダラダラと続くものと予想されています。そのため、基本的には、リアル合唱練習の再開は当面再開すべきではないと考えます。もちろん、地域の感染者数にかなりの差があり、再開できる地域は、少しずつ「三密」回避をしながら、リアル合唱練習を注意深く行うことは大切だと考えます。ある意味、今後の一つの指針となることとなります。

今日本の合唱団の「出口戦略」「ロードマップ」の指標を欲しています。

全日本には、国際合唱連合とのルートがあります。諸外国のウイズコロナの合唱再開のガイドラインの情報も入手しやすいと考えます。台湾では、リアル合唱練習を再開したという情報もあります。国際委員会の一日も早い情報収集が求められます。私たちが求めているのは、昔のハーモニーの特集の紹介や演奏の紹介だけではありません。

実際にガイドライン等を作成するにあたっては、合唱経験のある、感染管理にノウハウのある医療関係者などに意見を求めることにより、効果的な対策を行うことが重要です。

それがホール関係者や公的施設側の安心感につながっていきます。

④全日本だからできること

合唱連盟としては、行事の中止などを、一刻も早く決断し、様々な問題を検討することが求められています。問題点を整理し、短期・中期・長期の展望を描くことです。そして、発信、行動の段階に進まなければならないと考えます。私たち合唱人の叡智を結集しなければなりません。考え、行動すべきことは山積みされているからです。そして、大きな変化を迎える未知の時代、ポストコロナの合唱活動に備えなければなりません。

日本オーケストラ連盟の緊急メッセージ「イベントの催行についても、一律の全面的自粛でなく、地域ごとの状況や個々のイベントの性格を勘案したきめ細かいガイドラインの策定が望まれます。」のように、活動再開については、合唱だけの問題ではありません。

これは、吹奏楽、オーケストラ、演劇、ミュージカル、歌舞伎など集団で行う舞台芸術共通の課題です。漫才やコント、テレビ番組制作、映画製作、ライブハウス、ホール関係者なども含めて、感染リスクのために活動を休止している組織や業界が協力して、ガイドライン等を専門家と協力して作成しないとないと考えます。プロ野球とJリーグが共同で連絡会を早くから取り組んでいたような取り組みが早急にできないのでしょうか。

戸ノ下達也氏が、「演奏や作曲などの実務家、演奏団体、劇場とそのスタッフ、演奏活動や創作活動に欠かせないスタッフなどの皆さんの、生活と演奏や創作環境の維持は、最大の課題でしょう。」「生活支援と自粛解除の際の円滑な活動再開の支援です。」しているように、合唱指揮者・声楽家・ピアニスト、合唱文化の中核となっているプロに対する経済的な問題に対する支援の在り方の模索、行政への働き掛けができるのは全日本などのような大きな組織であり、いくつかの団体と連帯しての行動ではないかと考えています。

9 分断から融和・連帯へ

私たちは、この先どうなるのか見通しが立たず、言いようのない不安にさいなまれていきます。その不安や危機感が根底にあるために、これまで潜在していた他者への違和感や不満が表面化し、「ネットワーク上での会話は文字のみで行うので思わぬ誤解が生じる可能性がある」といった特性から、感情的なやりとりや、一方的な攻撃も存在します。

「子供たちが学校に行くのを我慢しているのに年寄りは何をやっているのか」
「他の地域の学校は泣く泣く活動を止めているのに、今練習をしているなんて」
「苦しい中でも頑張っている私たちが批判されるなんて」
「〇〇先生の合唱団は、全国大会狙っているからまだ練習やっているんだって」
「〇〇先生はオンラインレッスンの宣伝ばかりやって」
「私は守旧派、オンラインもバーチャルも理解できない」

など、合唱団やプロの音楽家同士の分断が起きているような気がします。

また、部活動などは、競争原理が働いている面があり、強豪校ほど生徒も保護者も意識が高いため、近隣校やライバルが練習を再開しはじめると、すぐに SNS や LINE で情報が駆け巡り、うちもやらねば、という発想になるという話もあります。

地域や立場、方法論が違えば全て変わっていきます。私たちは、困難な時代をともに乗り越えていく同志として、互いを尊重しながら、連帯して、知恵を出し合い、連帯してこの未曾有の危機を生きていかなければならないと考えます。

10 経済的な問題

早くから、平田オリザ氏や宮本亜門氏らの発信、オーケストラの存続の危機など報道されており、新日本フィルの運営を支える募金（1000 円～）などもスタートしています。4 月 6 日に、日本オーケストラ連盟は「オーケストラ音楽の存続のために」のメッセージを発表しました。

フリーランスの音楽家への経済的な問題は深刻な問題です。

しかし、事態はさらに深刻ではないでしょうか。コロナ世界恐慌の到来です。世界が経済再開を急ぐ背景でもありますが、経済悪化は、合唱音楽にも大きな影を落とします。既に「大学生らの約 6 割がアルバイト収入が減ったり、なくなった」「13 人に 1 人が、大学を辞める検討」などと報道されています。

今後の展開次第では、コロナ恐慌が起きれば、演奏活動が再開したとしても、公的助成が相当厳しくなり、協賛企業の減少、広告収入の減少などが起きます。さらに、経済的困窮によって合唱団活動に参加する人も確実に減ります。

苦しい時にこそ私たちには「うた」が必要です。「うた」は人を支えます。

残念ながら、合唱団の活動やコンサート開催には経済的基盤が欠かせません。実はここが深刻な問題なのです。

11 まとめにかえて

少子高齢化による合唱人口の減少という大きな課題を抱えながら、国際化と情報化の進展により日本の合唱水準は飛躍的に向上しました。そして、東日本大震災による合唱の力の再認識、合唱団同士の連帯、合唱人、合唱団がこれまでの常識や経緯を超えてつながることが日常となりました。

東日本大震災後、音楽は灯となりました。合唱は人の力となりました。合唱は新しい時代に入ったはずでした。しかし、コロナにより、私たちの合唱活動は休止状態に。誰がこんなに長きにわたると予想したのでしょうか。そして、その夜明けは光すら見えません。

リモートコーラスやオンラインレッスンは、可能性はありますが、絶対的なものではありません。（取り組んでいらっしゃる方は百も承知でしょう。）

もちろん、可能性は追究しなければなりません。しかし、日本の合唱人はそのようなこととは縁遠い活動をしています。そういった人々や合唱団は淘汰されていくことこそが、日本の文化・芸術の危機ではないのでしょうか。

かつてない危機の中、あまりにも長期化する練習休止に不安と絶望の中に私たち合唱人はいます。ポストコロナは2年～4年かかるでしょう。ポストコロナの合唱の在り方は大きく変貌を遂げることでしょう。しかし、私たちは備える時間はあるのです。

私たちはこれまで、これほどまでに歌いたい、コンサートをしたいと渴望したことがあったのでしょうか。そして、リアル合唱練習の素晴らしさ、意味を考えたことがあったのでしょうか。倍音の中、ともに歌い合うことによって、空間と時間の中で合唱演奏を創り上げる喜びを、進化を遂げた合唱人が繰り広げるのです。そんな未来を夢見ましょう。未来のために努力しましょう。

危機は人間を進化させます。危機感を共有し、連帯し、できることから一つ一つ丁寧に進めていくことによって、ウイズコロナのリアル合唱練習も可能になるはずです。分断から融和へ、連帯で未来を切り拓きましょう。



宮城県気仙沼市大島で撮影/千葉敏行